

Title	道順の説明(随想)
Author(s)	横川, 正之
Citation	泌尿器科紀要 (1976), 22(3): 183-183
Issue Date	1976-04
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/121946">http://hdl.handle.net/2433/121946</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 随 想

## 道 順 の 説 明

横 川 正 之\*

おききになっている方も多いと思いますがNHKラジオに“じょうずな話し方”という番組があって、もう何年も延々と続いているようです。私がききはじめからの番組では、電話の応対、会議のすすめ方、セールスマンの売り込み話術などが記憶に残っています。流暢な話し方を教えるというよりは、会話のルールとか話し方の作法について考えるというのが趣旨で、毎回10分ずつですが、肩をこらさせずにそれでいて教えられることの多い番組です。

この番組でかなりまえに、電話で道順をきかれたときの教え方という話がありました。道順というのは図で書くにもかなり要領がいりますが、言葉で言うのはそれ以上にむずかしいことは皆さんご経験のことでしょう。バス停からの道順を教えるときは、右へ向かって歩けとか東の方向へというのではなく、バスの進行方向へというようにまず方向を正しく教え、加えてバス停から見える建物、たとえば〇〇銀行ビルのような大きな目標を教えて、これを確認することによって相手を安心させる。またそのあとの曲り角についても、単に「ガソリンスタンドのところを左へ」ではなく、スタンドの手前を曲るのか通り過ぎてから曲るのかまで細かく正確に教えたいといった内容でした。自分にとってはわかりきった道順であればあるほど、“相手の立場に立って”教えるという親切さがほしいというのが結論でした。

“他人の身になって”というのは道順の説明だけでなく、よい対人関係を得るための基本でありましょう。しかしこの放送をきいたとき私は、われわれが学会や論文で自分の研究や考え方を公表するときにも、全く同じことがいえるのではないかと思ったものです。論文というのは研究の（いちおうの）結論に至る道順を、知らない人に図や言葉で説明することにほかなら

ないといえそうだからです。

新入医局員がはじめて抄読会の当番にあたると、ほん訳はどうかできても、全体の文脈がごちなくて、聞いている方によくわからないことがあります。そうすると、どういう動機ではじめた研究なのかとか、いったい何をいわんとしているのか、とって先輩達におどかされます。もっとも、おどかしている先輩も、かつては同じ目に遭っているに違いないのですが…。引用文献をよく読んで過去の研究の経緯とか問題点をよく理解していれば、論文の趣旨もよくわかるはずなのに、その余裕がなかったり、不運にもそういう親切さに欠ける論文を選んでしまったためなのでしょう。

自分の言いたいことを正確に他人にわかってもらうためには、研究の動機や目的を含めて、思考の道順を“地理不案内な相手の立場に立って”説明するのが理想でしょう。しかし学会には時間制限があり、論文には枚数制限がありますから、そこに“じょうずな話し方”が必要でしょう。論文の内容を道順の説明にたとえていえば、最初におよその道のりを言っておかないと相手はイライラするでしょうし、小目標ばかりたくさん教えると、かえってわかりにくくなります。ある先輩が私に向かって、学会ではこれぞと思う一つのことだけを言えと注意してくれたことがありましたが、なるほど私の欠点をよく知っているわいと感心したものです。

名講演といわれるものは知らず知らずに主題にひきこまれ、聴き終わって爽快感を味わいます。そのコツは何でしょう。あの放送をきいて以来、私は“他人の立場に立って、相手に道順を説明するつもりで”を自分自身に言いかせていますが、なかなか思うようにはゆきません。意に反して大変えらそうなことを書いてしまいましたが、ひと倍の口下手と筆の遅さに悩んでいる私がある放送番組にかこつけて感じたことを書き綴りました。

\* 東京医科歯科大学教授（泌尿器科学）